

十一谷義三郎「唐人お吉」の誕生

関

肇

もし、後世の人々が、たとへちよいとでも、お吉の名といつしよに、僕の名をおもひだしてくれたら、僕は、天下一の、幸福人だ——思つてゐる。

十一谷義三郎「自己を語る」(『文学時代』昭5・4)

はじめに

新感覺派の同人雑誌『文芸時代』に創刊当初から参加し、横光利一や川端康成とともに大正末に新進作家として文壇に登場した十一谷義三郎は、昭和初年頃から本格的な文学活動を展開しはじめ、やがて代表作となる連作小説「唐人お吉」を発表する。幕末期の伊豆下田を舞台に、日米修好通商条約締結交渉のために来航したアメリカの外交官タウンゼント・ハリスに侍妾として仕えたとされる日本人女性をめぐる物語である。

連作小説「唐人お吉」は、昭和三年から六年にかけての足かけ四年にわたり、総合雑誌から中央の新聞メディアへ、

そして婦人雑誌へと発表媒体を変えながら書き継がれた。その発表状況は次のようになる。

「唐人お吉——らしやめん創生記——」（『中央公論』昭3・11）

「《統》唐人お吉——種播く人と彼女——」（同、昭3・12）

「時の敗者——唐人お吉——」（『東京朝日新聞』夕刊、昭4・6・29～10・6）

「時の敗者——唐人お吉【統篇】——」（同、昭5・3・29～6・4）

「唐人お吉——時の敗者——」（『婦人世界』昭6・1、2、4）

最初の二回に分けて発表された『中央公論』掲載分は、その後ただちに単行本化され、昭和四年一月に『唐人お吉』として萬里閣書房から刊行された。また、『東京朝日新聞』夕刊への連載時には、木村莊八が挿絵を描いたが、彼は単行本の装幀も担当し、新聞に掲げた挿絵をすべて収録した美しい造本として、昭和五年二月に『敗者の唐人お吉』、同年七月に『時の唐人お吉統篇』が新潮社から出版されている。次いで『婦人世界』に連載された分は、「獣心開化・横浜ばなし」という章題のもとに、その第九節までが同じく木村莊八の挿絵入りで掲げられた。

物語は幕末の下田を舞台として、お吉の生い立ちから書き起こされ、ハリスの侍妾となるまでの経緯、世間の偏見と差別のまなざしにさらされるお吉とハリスとの関わり、ハリスが下田を去り江戸へ行った後の芸者づとめをするお吉の生活ぶりなどを中心として展開する。終篇にあたる『婦人世界』連載の「唐人お吉——時の敗者——」は、ハリスがアメリカに帰国してから十年近くが経過した明治初年の横浜に舞台を移し、新内流しに身をやつしたお吉のその後を描こうとしたもので、末尾には「つゞく」とあるが、ほんのわずかに端緒が開かれただけで中断され未完となっ

た。すなわち、それは後日談的な色合いの強い断片的なものであり、『中央公論』および『東京朝日新聞』に発表されたところまでで、一応のまとまりを持つ小説として捉えてよいだろう。

十一谷義三郎の「唐人お吉」は、発表後まもなくお吉ブームを呼び起こし、繰り返し演劇や映画に仕組まれて息の長い命脈を保ちつづけている。ただ、その声価は、彼の「唐人お吉」から離れて独り歩きし、悲劇的なヒロインとしてのお吉と外交官ハリスとの関係をめぐる歴史的な逸話を広く社会に浸透させる役割を果たしたものとして、あるいは映画や演劇の原作として知られてはいても、その小説自体はほとんど顧みられていない。しかしながら、この小説は、たんなるお吉をめぐる物語の源泉としての地位にとどまるべきものではなく、今日なお読み継がれるに足る、すぐれた文学的価値を有していると考ええる。しかも、それは十一谷義三郎の文学活動におけるひとつの転換点を形作るものであり、さらにメディアとその読者層やテキストと挿絵との関わりなどについても重要な示唆を含んでいる。本稿は、これらの問題を解明するための基礎的な考察であり、それによってこの小説の再評価への糸口となることを目指したい。

なお、本稿では連作小説を総称して「唐人お吉」と記し、個別に指示する場合には雑誌・新聞の初出および単行本のタイトルを用い、適宜サブタイトルを付すことにする。

創作過程の曲折

まず、『中央公論』の昭和三年十一月号に「唐人お吉——らしやめん創生記——」が発表された経緯を確認しておく。この小説の『中央公論』における扱いは、きわめて異例なものだった。総合雑誌である同誌は、論説や社会経済時評、海外情報、随筆など多様なジャンルの質の高い記事で構成されていたが、創作欄はその誌面の後半部にあり、ノ



『中央公論』昭和3年11月号広告（『東京朝日新聞』昭3・10・19）

ンブルを独立させてゆつたりと一段に組み、通常は三、四篇の短篇小説や戯曲を掲げていた。ところが、「唐人お吉」の場合、この一作だけで創作欄を埋め、原稿用紙約二百枚が一挙に掲載されたのである。十一谷義三郎と『中央公論』との関係は、同年二月に掲載された「灯と唾」にはじまり、七月には「仕立屋マリ子の半生」を発表して高く評価されていたが、新進作家のひとつの小説で創作欄を占めたのは破格の待遇といえる。

「唐人お吉」は同誌の呼び物として、雑誌発売時の新聞広告にも大きく取りあげられている。たとえば、『東京朝日新聞』(昭3・10・19、上図)では、

小説

『唐人お吉』

「唐人お吉」というタイトルを示し、「中央公論創作欄の全部を挙げて世に問ふ所以のものは年余の苦心と準備とを以て成れる近來希有の力作であるが為めのみではない。些か嗜眠状態に在る我昭和三年度の文壇を震撼せしめるに足ると信ずるが故である」という高らかな調子のコメントを付している。また、『東京日日新聞』(昭3・10・20)や『大阪朝日新聞』(同

貧しき船大工の児として生れたお吉、その美声と美貌が辿る奇しき運命が遂に彼女を我國最初の洋妾たらしめる迄の経緯を、黒船来航、安政の大震大海嘯等人心騒然たる當時を背景に活写せる二百枚に近き大長編である。作者半歳の精進鏤彫の跡は其一言一句にも窺はれ、微塵も危つ気のない手堅い手法である。言を強めれば彼の「女の一生」にも

比すべく、本年唯一の收穫たるを疑はない」と、その物語内容を紹介し、作者の苦心にふさわしい力作であり傑作であることをアピールした広告が掲げられている⁽¹⁾。

当時の『中央公論』は、名編集者として知られた滝田樗陰が大正末年に死去した後、円本ブームと経済不況のありを受けて売れ行きが低迷して累積赤字に苦しみ、明治後期から長年にわたり経営にあたってきた麻田駒之助はこの年の七月に引退し、主幹の嶋中雄作が事業を譲渡されたばかりだった。十一谷義三郎の「唐人お吉」が異例の厚遇を受けたのは、おそらく生彩の乏しい誌面に新機軸を打ち出そうとしたものに違いない。同時にそれは、競合する総合雑誌として後発ながら急成長して同誌を追い抜いた『改造』（大8・4創刊）の創作欄が、主に既成作家の発表舞台となっていたのに対して、差異化をはかるための方略でもあった。その『中央公論』のささやかな試みは、必ずしも沈滞した局面を好転させたわけではないが、「唐人お吉」という小説が社会的に大きな関心を集める重要な契機となったことは確かだろう。

一方、十一谷にとっても「唐人お吉」は、幕末維新の歴史的な出来事に立脚して自らの文学の新境地を切り拓くための試金石となるものだった。「僕がはじめてお吉の存在を知つて、調べにかゝつたのが、昭和三年一月のこと」（『唐人お吉第三春』『文芸春秋』昭5・1）とされるが、彼は綿密に資料を蒐集調査し、下田を訪ねて取材も行い、夏から秋にかけて小説執筆に精魂を傾けた。その創作の苦心と意欲は、中央公論社新社長の嶋中雄作に宛てた書簡にうかがうことができる。『中央公論』十一月号に向けて「唐人お吉」を入稿する直前、九月二十五日に中央公論社の新旧社長送迎会が開かれ、十一谷は欠席したが、その数日後の嶋中宛書簡には次のように記されている⁽³⁾。

先頃も申し上げました通り一先づ百九十三枚書き上げ読み返し入念に訂正推敲致し最初から書き換へたり実に天

分の薄き所為か全く苦勞ばかりにて四ヶ月費しました。そして初めの方にやっと少し自信を得来り少々気持ちに樂になりこれならば発表してもと考へる処まで参りました。第一が時代第二が環境、当時の經濟生活、風俗、流行 黒船事蹟、安政大津波それらが主人公に対する影響を芸術的に這入つてゆくこと 以上が前半、後半はハリスと主人公、主人公がいかに時代に弄れその結果ハリスに対して如何に愛憎に苦しんだか、を主として書いて見ました。後半はまだ自信がありません。(推敲未了)

題は 心の芽

——ラシヤメン創生紀——

心の芽は少し弱い感じですが今はそれに定めて居ります 小見出しは変へません。これだけの大事件を自分の芸術にまとめる為御迷惑をおかけし、自分も苦しみ実に殆ど自分で自分の力を知らずに盲進致しました。下田でも発表を待つてゐて色々云つて参ります 例の村松ものスジなり原稿なりとは全然違つたものです。兎も角此の一作には私の全力を注いで見ました 手前味噌で實に心苦しく存じます 四ヶ月程殆ど夜は寝たことが無い有様で神経衰弱もあるだらうと御憫笑下さいまし、

ここには、高い芸術性を追究して納得のいくまで推敲を重ね、決して妥協を許そうとしない十一谷のストイックな姿勢が鮮明に示されている。それだけに長篇小説を完成させることは、困難をともしなうことになる。原稿締め切りが迫っているにもかかわらず「後半はまだ自信がありません。(推敲未了)」と不安をもらしたこの書簡の用件は、『中央公論』十一月号に全篇を一挙に掲載することを取りやめ、後半は十二月号に分載してほしいと嶋中に懇願することにあつた。

また、この書簡で「下田でも発表を待ってゐて」云々と言及されているのは、下田で発行されていた地方雑誌『黒船』の同人たちのことであり、「例の村松もの」とは、この雑誌に連載された村松春水の「黒船閑話」（大13・10・14・7）をはじめとするお吉に関する伝記を指している。郷土史家の村松は、幕末の下田開港関係の古記録を探索したり土地の古老からの聞き取りを行ったりして、お吉の事蹟を掘り起こした立役者であり、十一谷の「唐人お吉」は、そのお吉関係の調査に依拠するところが大きかった。しかし、その興味本位に流布する通俗的な理解とは一線を画して、十一谷は独自のお吉像を文学的に提示しようとする強い意欲を表明している。同じ嶋中宛書簡の後方には、「何んとかして時代的精神或は社会の流行及一身の周囲が一人の個人に迫ってゆく力とそれらの美德と悪徳と個人のそれに対する心構への変化等、を新しい文学として問ふてみたいと云う志だけをどうぞ御憐察下さいまして我俣を御宥し願ひたく存じます」ともある。

結局、この分載の要望は嶋中に聞き入れられ、続篇を翌月号に掲げることになるが、十一谷が予定していた「心の芽」というタイトルは退けられた。この「心の芽」とは、ヒロインのお吉が自己の生き方について主体的に内省するようになっていくその萌芽のさまを含意するものであったと考えられる。だが、その主題は「ハリスに対して如何に愛憎に苦しんだか」を中心に描く小説の後半部で展開されるはずであって、分載される前半部にはそぐわないし、読者の関心を惹きつけるには印象が「少し弱い感じ」も免れない。そこで主人公の不幸な人生を表象するタイトルとして、彼女に浴びせられた「唐人お吉」という蔑称が選ばれることになったのだろう。

『中央公論』十一月号に発表された「唐人お吉——らしやめん創生記——」は、「一 唯一つある家」、「二 黒船神経・屯田女隊」、「三 O-HA-Yo-I」、「四 風見」、「五 ぷうちやん軍船から——」、「六 コン四郎さん」の六つの章に分けられている。このうち五章までは、ヒロインお吉の生い立ちや下田の風俗、ペリーの黒船とロシア使節プチャ

イチンの来航、安政初年に下田を襲った大津波など、下田の人々が変動する時代状況に翻弄されるさまを描き、六章でようやくハリスが下田に来航して玉泉寺に仮領事館をおき、お吉との交渉がはじまりかけたところで途切れている。その点で、先にふれた『中央公論』発売時の新聞広告での謳い文句は、やや誇張にすぎると言わざるをえないだろう。『東京朝日新聞』掲載の広告を見た十一谷は、十月二十日付嶋中雄作宛書簡で、せっかくの好意に応えることができなかったことを詫び、「あの後が面白くもあり頭の中で出来ても居りして遂々筆に現すことが出来なかったとしまじみ悔んで居ります」、「ほんとにあの玉泉寺で、お吉が町の人々の迫害とハリスとの板バサミになる気持ちこそ、拙作の最後の覗ひ処でしたのに」というように、しきりに反省の言葉を重ねている。そして、これに対して嶋中から激励する返事がすぐにあつたらしく、同月二十二日に十一谷は再び嶋中宛に書簡を送り、「御言葉に甘へてあと六十枚前後書かせていただきます 五日頃には書きあげて御届け致します 玉泉寺のハリスとの生活を右枚数でまとめそれでお吉とはお別れに致します 今になると、こゝは書くのに楽で、同時に一番面白く一番気乗りがいたします 読者の期待もこゝが一番だと考へます」と記している。

しかし、その続篇は、『中央公論』十二月号に「種播く人と彼女」というサブタイトルを付して発表されたが、半ば以上がハリスの幕府役人との談判や領事館での生活の叙述に費やされ、十一谷が「拙作の最後の覗ひ処」と説いた「お吉が町の人々の迫害とハリスとの板バサミになる気持ち」は十分に描かれているとは言ひ難い。しかも、「らしやめん」という烙印を押されたお吉については、「彼女は、たとへば、あのへロリが、二年前に持つて来て、試験して見せたテレグラフや小火輪車のやうに、日本に最初の、唯一一つの社会的存在で、どの階級にも属せず、従つて、それだけに寂しい悩みを持つてをつた」、「いまの彼女は、につぼん最初の和洋生活者で、その二つの生活様式が、彼女の頭の内に、無慚に分裂して、彼女の足を掬ひ、彼女の溜息を絞り取るのだつた」、「この悩みの上に、へロリ以来、「唐

人禍」の海嘯を越えて、ずつと、町の陽気のシムボルにされ続けて来た彼女で、従つて、彼女は、そんな目標を失つた町の失望と、反感と侮蔑とを、当然、引背負はねばならなかつた」というように、その特異な引き裂かれた境遇をストレートに裁断する生硬な表現が目立ち、小説としての広がりや興行きが希薄になつてしまつてゐる。この続篇は、十一谷にとつても満足のいくものではなかつたはずである。それはこの続篇に描かれたハリスとお吉との関わりが、あらためて半年後に『東京朝日新聞』の連載小説「時の敗者——唐人お吉——」として書き直されていることに明らかだろう。

もともと十一谷は遅筆で知られていたが、「唐人お吉」の執筆をこれほど渋らせた要因はいったどこにあつたのか。それは、歴史的な出来事を背景とするこの小説において、史実とフィクションの關係をどう折り合わせるべきかという問題に求めることができるのではないだろうか。

歴史小説の作法

十一谷義三郎の「唐人お吉」は、先述の下田の村松春水が調査したお吉の伝記や古記録類のほか、彼が独自に蒐集した古文書や写本類などの数多くの史料にもとづいている。また、その史料への耽溺ぶりは、『中央公論』への分載後すぐに出版された単行本『唐人お吉』にも見ることができる。この書物は、小説としては一風変わった構成で、巻頭には十頁にわたる口絵があり、十一谷が所蔵するお吉遺品のアメリカ製瀬戸歯ブラシ入れや幕末に飯領事館がおかれた玉泉寺、ハリス像、関連する古文書類や調度品、ゆかりの地などの写真版とお吉の遺跡の位置を記した下田の地図を掲げ、次いで序文が付されている。また、見返しには、安政二年発行の下田港を俯瞰した絵図が印刷されている（裏見返しも同じ）。そして書物の中核をなす小説そのものは、タイトルが『中央公論』十一月号での「唐人お吉——ら

しやめん創生記——」に統一され、十二月号掲載の続篇は、第六章の小見出しを「種播くコン四郎氏・らしやめん」と改めてここに組み入れられた。さらに、この小説の後には、十一谷が手を加えた村松春水の伝記「唐人お吉を語る」、幕末の黒船に関する随筆や詩歌を抜粋した「くろふね耳袋」が収められている。つまり、小説「唐人お吉」が、雑多な史料や情報に取り巻かれるかたちになっているのである。

この書物の序文において、十一谷は自ら蒐集した雑多な鼠臭い文反古類のことを「紙屑」と呼びつつ、それが持つ存在意義を、「こんな、忘れられた屑の中にこそ、その時々^④の生活や、時代精神や、またそこに虐たげられ、甘やかされた個人の姿などが、生々しく潜んでゐると信じたからだ。経済史や文明史や社会思想史など、学者の抽象癖に殺された記述に手頼るよりも、直接に、端的に、かうした過去の心臓に触れる方が、遙に有意義だと氣附いたからだ」と説いている。歴史から排除された部分に強い関心を寄せ、古臭い「紙屑」を蒐集し、その中に過去の人々の生活や時代の息吹きを読み取ろうとするのである。しかも、その姿勢は、現代について知ることと密接不可分な関係にあることに留意したい。続いて彼はこう述べている。

そんな死物を見て、それが一体何になると、反問されさうだが、現代は、過去の莖なくして、空中に開いた花でなく、未来は現代の種に依つて、初めてある特定の姿を持つことを、常識的に考へても、これは問題ではない。現代へのペネトレーションを深め、そこに、ありのまゝの姿と、その未来への動きを把握し、さうして、またそこに、正しい理想を体得して、それに声を与へやうとするためには、かゝる過去への骨の折れる努力も辞してはならぬと、考へられる。

現代への洞 察を深めるために、既成の歴史研究を頼らず「紙屑」そのものに向き合うというのは、確かに「骨の折れる努力」であり、また迂遠なやり方に相違ない。にもかかわらず、あえてこうした「紙屑」にこだわる十一谷について、「偏執狂的」に、気がすまない男」と評する川端康成は、「時代風俗などを、徹底的に考証しないと気がすまないことのために、現代のジャアナリズムの形式の下では、製作が殆ど不可能な程の苦しみに、再三再四陥つてゐる。月足らずの子を幾つか産んでゐる。普請中の建築を幾度か見棄ててゐる」（『文芸時評』『文芸春秋』昭4・9）と指摘している。「唐人お吉」もまた、そうした「月足らずの子」として産まれたことになる。

ただ、ここで注意したいのは、十一谷が「紙屑」を通して捉えようとする過去とは、非実体的なものであつて、決して歴史に埋没した過去の再現を目指しているのではないことである。

後に彼は、「事実と創作」（『日本現代文章講座』第一巻、昭9・8、厚生閣）において「歴史小説に於ける史実の扱ひ方」を二つの態度に大別している。第一のタイプは、「歴史をより良き歴史たらしめんとするもの——つまり、歴史に現実感を与へ、その印象に生彩あらしめ、従つて読者に、親しみと切実味とを以て迫り、その窮竟に於て、歴史をより正しく認識せしめる効果を及ぼすもの」であり、普通の歴史小説をいう。それは、一般に歴史がきわめて概念的になりがちな「欠点物足りなさを補はん」とする役割を果たし、「歴史が輪郭と墓碑銘に終らんとするとところを、骨と血と肉と呼吸を与へて、生々躍動の世界を再現しようとする」のである。これに對して、第二のタイプについてはこう論じている。

その二は、材を史実に求めながら、これをまた作者の主観に依つて、つまり人生観乃至世界観に依つて、普通の史実とは認めがたき、つまり史家的眼光とは全然別箇の解釈に於てもものされる作品である。この際、読者は、

よりよき歴史を読んだと云ふ感銘よりも、むしろ、なるほどかかる見方もあるか、と云ふ感銘を得ることが普通であり、否、むしろ、歴史としてこれに對せずして、一箇の創造として對するのが普通である。

この二つのタイプの例として、前者にデュマ・ペール、後者に芥川龍之介をあげ、さらに「生々躍動の世界を再現しようとする」前者は「よりよき歴史」として価値を持ち、「一箇の創造」である後者は「芸術品」として価値があるとしているが、十一谷の立場が後者にあることは言うまでもない。しかも、注意したいのは、同じく第二のタイプではあつても、芥川と十一谷とでは、その過去の捉え方は大きく異なることである。

よく知られているように、芥川は「或テエマを捉へてそれを小説に書く」とき、「芸術的に最も力強く表現する為には、或異常な事件が必要になり、それを「不自然の感じを与へずに書きこなす必要上、昔を選ぶ」のであつて、「所謂歴史小説とはどんな意味に於ても「昔」の再現を目的^{エンド}にしてゐないと云ふ点で區別を立てる事が出来るかも知れない」（「昔」―僕は斯う見る―『東京日日新聞』大7・1・1）と述べている。つまり、芥川が過去を舞台とするのは、あくまで今日的な関心事を自在に表現するための手段にすぎなかつた。これに對して、十一谷の場合、過去は現代を投影する仮初めの舞台ではなく、むしろ現代への洞察をもたらず貴重な掘り所に他ならなかつた。いわば芥川が自在に歴史離れをするとは対照的に、十一谷は歴史に寄り添いながら、現代を照射する過去のありえたかもしれない様相を幻視していくのである。

たとえば、「唐人お吉」のサブタイトルに「らしやめん創生記」とあるが、小説の冒頭にはこの「らしやめん」という言葉をめぐる二つの文献が引用されている。一つは、石井研堂の『明治事物起原』^増（大15・10、博文館）であり、「これ人倫部に入るべきか、畜類部に入るべきか、決しがたき動物の名なり」として、『嘉永明治年間録』安政四年四月

の条から、「亜人下田滞留中唄風説」というハリスとヒュースケンの侍妾に関する噂を抜粋し、「未だラシヤメンの名無きが如きも、(中略)国人皆外人を鬼畜視する際なるに、きちふじの二少女が、夜々玉泉寺へ通勤せる勇氣に驚く」と記している。もう一つは、喜田川守貞『類聚近世風俗志』下巻(明41・12、国学院大学出版部)からの引用で、「武州横浜にて西洋人の妾となる女を異名して「らしやめん」と云ふ。(中略)洋人犬を堂に上し又己が閨房中にも臥せしむ。国人誤つて洋夷は犬及び綿羊を犯すと思ひ、その犬羊と同じく処女の夷妾となるを卑しめ、雑夫假名を付て羅紗めんと云ひ初しが遂に通称の如くなる」と、この言葉の由来を説いている。

これらに示されているとおり、下田にはお吉のほかにヒュースケンの侍妾となつた女性(「ふじ」とあるのは、正しくはお福)が存在していたし、当時はまだ「らしやめん」という言葉はなく、後に横浜が開港して居留地が設けられてから、「西洋人の妾となる女」の蔑称として生まれたものであるが、「唐人お吉」においては、そうした実体的な歴史の事実にとらわれず、ヒュースケンに仕えた女性を物語から消去することによって、過去を遡及するかたちで「らしやめん」の起源をお吉ただ一人に措定し、「日本に最初の、唯一つの社会的存在で、どの階級にも属せず、従つて、それだけに寂しい悩みを持つてをつた」と、世間から徹底的に孤立していくお吉の単独性を浮かび上がらせることになる。つまり、「唐人お吉」における過去は、再現というよりもむしろ創造されたものであり、日本で最初の「らしやめん」としてお吉を意味づけ、その誕生の物語を紡いでいくことが、「らしやめん創生記」というサブタイトルに指し示されていると考えられる。

こうした創造された過去のあり方は、「唐人お吉」の後半部に描かれる、お吉がハリスのために用意する牛乳をめぐるエピソードにもうかがうことができる。前述の単行本『唐人お吉』巻頭の口絵写真には、いわゆる「紙屑」のひとつとして、ハリスが下田付近の村々から牛乳を高値で購入した記録「ハリス飲用牛乳の覚え書」が掲げられ、また

同書に収録された村松春水の「唐人お吉を語る」は、日本では牛乳を飲用していなかった当時、お吉はハリスのために密かに牛乳を工面し、それが契機となつて幕府の役人を動かし、ハリスは公然と牛乳を購入できるようになつたという伝聞を記している。このエピソードは、十一谷の「唐人お吉」にも取り入れられ、お吉がコン四郎 (Consul〔領事〕の転訛、ハリスをいう)のもとに牛乳を持参すると「コン四郎さんの喜びはまるで子供だつた」とあるが、そこではこの出来事がお吉にもたらした微妙な心理的な変化に力点が置かれている。翌朝になつてお吉がコン四郎のもとから帰る途上、町の人々から「唐人お吉!」と嘲罵される姿を描き、続いて不躰に性的な言葉を投げかける一人の女とお吉との次のようなやり取りが展開していく。

それに、いつか、屯田女隊の一人が、彼女を掴へて聴いたことがある。

「姐さん、唐人は、何んするときにあれだと云ふがどう?」

その時、彼女は、どうしたのか、変に助かつたやうな気持ちに、カラカラと笑つて云つたのだつた。

「唐人だつて人間さ!」

さうして此の偉大な真理を発見したのは、彼女が——このおばさまの人形が——このコン四郎さんの人形が——この時代の人形が………たつた一人あるきりだつた。

ここで「屯田女隊」とは、下田に来港した船乗りの仮の妻を務め、船乗りが去ると芸者として稼ぎに出る、この土地の底辺に生きる女たちを指している。その女が発する唐人を野獣視したあからさまな侮蔑の言葉は、そのまま唐人のコン四郎に仕えるお吉に突き刺さり、社会から完全にこぼれ落ちた自己の存在を思い知らされることになるが、そ

のときはじめてお吉の内部に何ものにもとられないイノセントな境地が兆してくる。それまでのお吉は、少女時代には養育してくれた「おばさま」の「人形」となり、やがてコン四郎および時代の「人形」として生きてきたとされているが、そのお吉が、「唐人だつて人間さ!」という「偉大な真理」を発見するこの場面には、原タイトルにいう「心の芽」が生え出るさまが端的に表現されている。こうした社会的に差別され排除されたヒロインのお吉が「偉大な真理」を見出していくところに、現代社会が見失った理想的なあり方を過去に仮託しようとする十一谷の姿勢が示されているといえるだろう。

また、「唐人お吉」における物語世界の特質は、その独特な表現と文体にも見出すことができる。すなわち、ハリスをコン四郎、ヒュースケンをヒュウ助、ペリーをヘロリ、ピストルをヒストウルなど、幕末当時を思わせる古風な言葉と、寮、^{ヴィラ}好来客、花旗国、お上品な Tea-ceremony、^{エルカムゲスト}、^{アメリカ}炉辺風な寛ぎ、^{フアイヤサイド}甘い差向ひなど、英語の表記やルビを交えた新奇な言葉が混在していたり、あるいは過去の「紙屑」としての古文書類の無味乾燥な記事をそのまま書き抜いた簡素な文章と、「まるで第一等の衣裳屋のモデル・ガールみたいなお吉を作りあげること、それがこの家の生活原則で、それがこの海港町の「陽気」のシンボルで」といった技巧をこらしたモダンな文章が、異種混交的に響き合っている。そうしたエキセントリックで錯雑した文体を駆使することによって、「らしやめん」としてのお吉が生きた特異な物語世界は紡ぎ出されることになる。

それまで十一谷は「厳正な写実主義であらうとしてゐ」たのに対して、「唐人お吉」を境に「創作の動機、意図に於て、彼が非常に動き出してゐる」と川端康成は述べている（前掲「文芸時評」）が、確かにここで十一谷は、主題的にも文体的にも大きな転換を試みていくのである。

「唐人お吉」の読者層

『中央公論』昭和三年十一月号の創作欄に「唐人お吉」が一挙に掲載されたとき、同誌の編集を担当していた木佐木勝は、翌月号のために続篇を執筆中の十一谷を訪ね、その印象を日記（昭3・10・22）に次のように詳細に記している。⁵⁾

十一谷義三郎という作家は不思議な人である。久しぶりの快晴だというのに、雨戸を閉め切ったまま蠟燭の光の下で原稿を書いているのだ。真昼の光の射し込む部屋では落ち着いて原稿が書けないという。蠟燭の光がいちばん執筆の氣持をかきたててくれるので、室内の照明は蠟燭に限るともいう。どうやら、この技巧派の作家は蠟燭の光が生む幻想に頼って書いているらしく思われた。「唐人お吉」は「らしやめん創世紀」という副題を持つ長編小説だが、十一谷義三郎は蠟燭の光の揺影の中に唐人お吉の過去の幻影を追っている作家なのだ。

自分とこの作家との交渉は最近のことだが、彼の書齋を訪ねてその秘密を知ったのは初めてだった。自分の身辺にはいままでこういう作家はいなかった。同じこり性で名人氣質の久保田万太郎や葛西善蔵とは、時代はひとまわり若い、この二人に共通する現代社会への逆行性と閉鎖性を感じさせるのが十一谷氏である。

書齋の閉ざされた空間に引きこもり、「蠟燭の光が生む幻想」によって「唐人お吉の過去の幻影を追っている」という十一谷の執筆スタイルは、現代を捉え返すための理想としての過去を創造しようとするその歴史小説の作法によく見合っている。久保田万太郎や葛西善蔵を彷彿させる「こり性で名人氣質」であり、「現代社会への逆行性と閉鎖

性を感じさせる」孤高を持する作家の素顔も、ここには明瞭に見ることができる。こうした時流におもねらず、ひたすら自己の文学的な理念を追究する、いわば反時代的な作家であるにもかかわらず、「唐人お吉」は発表以来たちまち世評が高まり、十一谷は否応なく時代の渦に巻き込まれていくことになるが、その急激な波紋の広がりはいったいどのようにしてもたらされたのだろうか。

「唐人お吉」は『中央公論』発表直後、その力作ぶりが注目を集め、多くの新聞・雑誌の文芸時評で取りあげられている。また、昭和四年一月には、「唐人お吉」の功労が認められて、前年度の新進作家のすぐれた文芸作品に贈られる文芸協会の渡辺賞^⑥を獲得することになる。ただ、同時代の批評のなかには、「扱はれた時代の珍らしさ、それに反して文章のスタイルの新鮮さが、何とも言はれぬ雰囲気を作つて、不思議な感触を生むである。（中略）随所に示される考証は、作者の骨折りを思はせる」（大木雄三「今月創作評（三）」「やまと新聞」昭3・11・12）、「十一谷義三郎氏の『唐人お吉』（中央公論）は、青野君の『調べた小説』であり、新居君の『エネルギッシュな小説』であり、多くの評家のいはゆる『身辺小説』から徹頭徹尾脱却した小説である。それ等の意味においてこの作は少くも現代が要望してゐる作品の一つであることには疑ひの余地がない」（平林初之輔「文芸時評（三）」「東京朝日新聞」昭3・12・8）といった高い評価も多少は見受けられるが、そうした賞讃よりも目立つのは、小説としての出来映えそのものについての厳しい意見に他ならない。

たとえば、新感覚派の同人として旧知の間柄にある横光利一は、「『唐人お吉』では、お吉に恋人の出来る迄の彫大な長さが、浮世絵の鈍い美しさの連続のために、その余りにも長い連続によつて、退屈する。（中略）その退屈の裏から忍び寄るアメリカ人の力が、退屈の重さを突き上げるほどに開港の眠りを騒がさない」と構成上の不均衡を指摘し、「験べた史実の本文をそのまま抜粋して並べた」叙述の方法についても、「私は作者に憤慨の口吻を洩さねばならぬ。

いつたい、此の作は史実を生かすがために書いたのか、それとも、描写を生かすがために書いたのであらうかと。(中略) 作者は読者に滋養分を供給するのが目的である以上、此の史実の新しい書き方は、今一考を要して貰ひたい」と批判している(『文芸時評』『文芸春秋』昭3・12)。また、プロレタリア文学系の批評家として活躍していた勝本清一郎は、「この作の特徴は、お吉に単に人間性を与へてその個人としての生活だけを描かうとしたものでなく、時代なり環境なりが——則ち歴史的な社会生活が、さうした個人生活の運命を決定して行く機微を描出して行かうとした意図にある」が、結果的には「失敗である」と断じ、「私はこの作者が余りにその蒐集物に捉はれて、則ちその知識の堆積の中にのみ「時代」を見ようとして、当時の社会生活を出るだけ生のまゝで見ようとする用意を二の次にした事を悲む」と評している(『^{時評}唐人お吉』『都新聞』昭3・11・4)。「唐人お吉」が意欲的な力作であることは、同時代の批評において一様に認められているが、かえつてそれゆゑに「自分はこの作品の良さを一面愛好するだけに、この作品に対する根本的不満を痛感せずには居られなかつた」(浅原六郎「唐人お吉の読後に」『不同調』昭3・12)というように、小説の欠点もまたさまざまに論じられていくのである。

しかし、「唐人お吉」の評判は、こうした文壇的な毀譽褒貶にとどまらず、むしろ文壇の垣根を超えて多様な読者に広まりをみせたことに注目する必要があるだろう。先述の『中央公論』創作欄に「唐人お吉」を一挙掲載した昭和三年十一月号の発売時の広告が新聞各紙に載つたとき、十一谷は幅広い読者が関心を寄せていることを知り、そのことを嶋中雄作宛書簡(昭3・10・22)に次のように記している。

色々な方面の人があの広告を見て是非読むと評判いたし居る由で、昨日もこれは大家文学の人々ですが、お吉を読まうとある雑誌社で皆が話しあつたと申してゐました 一般の人々も恐らく期待して読んで呉れるやうです

が、続唐人お吉が出ることが判れば小生の気持ちも幾らか楽ですし、皆も恐らく引続いて読んで呉れること、存じます 殊に今度の分が一番読者を悦ばせる点であらうと存じますから。

もとより総合雑誌としての『中央公論』の読者層は、文学愛好者にかぎらない。滝田樗陰の編集戦略にもとづき文芸路線に力を入れることで明治四十年代から急速に売り上げを伸ばした『中央公論』は、大正期に入ると民本主義を唱える吉野作造を常連寄稿者に迎え、大正デモクラシーの風潮に乗って一躍ジャーナリズムにおけるオピニオンリーダーとしての地位を確立し、それにもなつて読者の社会的な階層にも厚みが形成されていった。『中央公論』の読者層拡大はまず学生青年層から始まり、次いで他の世代や地方にも拡がり、全国的に広く当時の知的諸階層にも読まれるようになっていき、「知識人エリートの必読雑誌」というイメージが定着していった。⁽⁷⁾「唐人お吉」が同誌に掲載された昭和初期には、すでに最盛期の十二万部といわれた発行部数は八万部程度に激減して低迷にあえいでいたが、それでも『改造』と並ぶ有力な総合雑誌であることに変わりはなかった。しかも、『改造』の読者が二十代の青年層だとすれば、『中央公論』の読者は年齢層が三十代から四十代である⁽⁸⁾というように、文学好きな学生青年層だけでなく、ある程度社会的地位を確立した中産階級の壮年層に多く読まれていた。

「唐人お吉」が『中央公論』に発表されたとき、その評判を支えていたのは、こうした主力読者層である知識人の読者たちだったと考えられる。十一谷は、昭和四年八月二十三日の嶋中雄作宛書簡でも、「唐人お吉」は単なる文芸愛好家でない学者や有識有産階級人に余程問題になつたらしく、あれ以来たとへば某々の博士が小生の他の作の批評をしてゐるのを間接に聴いたり読書家の政府の要人が小生の読者になつてくれたりいろいろございました、「文壇の批評はどうあらうとも読者が、それも有識階級人が多少期待してくれることが今は少し明かになつて参りました、こ

れはうれしいことで同時に小生を始終緊張させます」と、当時の反響を振り返っている。

そうだとするなら、「単なる文芸愛好家でない学者や有識有産階級人」たちが「唐人お吉」に関心を寄せることになつた要因はどこにあるのだろうか。ここでは、それに関わる二つの社会的なコンテクストを見ておきたい。一つは、当時の日米関係の問題であり、もう一つは、幕末維新史の流行についてである。

第一の日米関係については、従来、「日本における『唐人お吉』ブームが高まつたときは必ず日米関係が緊張しているとする、『唐人お吉』ブームが対米感情のバロメーターになるという説」^⑨が言われてきた。しかし、注目すべきなのは、日米間の対立よりもむしろそれを修復しようとする文化的な活動との結びつきではないだろうか。周知のとおり、大正十三年七月に排日移民法が制定されて以来、日米関係には深刻な亀裂が生じるが、この事態を憂慮し、関係改善をはかる努力も官民にわたり積極的に行われていく。その過程で、幕末に來日した最初のアメリカ人外交官であるタウンゼント・ハリスが、日米親善の象徴的存在として浮上することになる。

大正十四年四月には、当時のアメリカ大使バンクロフトが、日米外交の基礎を築いたハリスの旧跡を訪ねて、下田の町を挙げての熱烈な歓迎を受け、新聞メディアでも大きく報じられた。さらに、これを契機として、民間外交に尽力していた洪沢栄一とバンクロフトとの間に、往事の領事館が置かれた下田の玉泉寺にハリスの功績を讃えた記念碑を設立する計画が持ち上がり、甚だしく衰廃して関東大震災時に大破していた玉泉寺の本堂も、日米協会の援助によって復旧にこぎつける。アメリカ留学経験のある政府関係者や実業家、学識者などを中心に大正六年五月に設立された日米協会は、民間レベルの文化交流の主導的な役割を担い、洪沢はその名誉副会長でもあった。そして昭和二年十月、玉泉寺境内でハリス記念碑の除幕式と本堂の落成式が、洪沢のほか、アメリカ大使マクヴェー、日米協会会長徳川家達らが列席して盛大に行われた。このとき来会者に頒布された冊子の中で、洪沢はハリスの功績について、「国

際間の問題が、常に威力を以つて解決せられしにも拘らず、君は正義人道に則りて、苟も虚喝の辞を弄せず、本国の為に図ると共に、又日本の利益をも尊重し、公平なる態度を持するを忘れざりき、（中略）爾来茲に六十有余年日米両国の国交日に親善を加へる所以のもの、蓋し、君によりてその基礎を築けるなり」と述べている。¹⁰⁾

こうして日米親善の功労者としてのハリスの存在が当時の社会に広く浸透していくにしたがい、下田でのハリスの生活に彩りを添えるお吉をめぐる逸話も次第に知られるようになる。ハリス記念碑建立の翌昭和三年三月には、日米関係の外交問題で知られたジャーナリストで東京朝日新聞社員の清沢洌が、評伝「唐人ハリス」を『中央公論』発表し、「下田芸者お吉のエピソード」の章を立てて、お吉がハリスの許に通うまでの経緯を説いている。清沢は、お吉侍妾説には否定的な立場をとるが、「芸者お吉が舞台面に出て来て、われ等の注意は端しくも、この点に引きつけられざるを得ない」とあるように、ハリスの事蹟を語るとき、お吉との関わりは無視しえない問題となっていくのである。やがてハリスについての再評価が一定するのにもない、主客が入れ代わるかたちで、日米外交の陰の立役者と目されるお吉が華やかな脚光を浴びるようになる機運は熟しつつあったといえる。¹¹⁾

第二の幕末維新史の流行については、大正十三年十一月に設立された明治文化研究会がその牽引役を果たしていた。同会は、吉野作造の呼びかけにより、尾佐竹猛、石井研堂、宮武外骨らが同人になり、「明治初期以来の社会万般の事相を研究し之れを我が国民史の資料として発表すること」（『明治文化研究会』に就いて）を目的として、機関誌『新旧時代』（大14・2創刊）を発行し、講演会や展覧会を開催した。明治文化研究会の活動は、ただ単に関東大震災で焼失を免れた貴重な文献や記録の整理保存を目指したのではなかった。すなわち、「資料の渉獵を基盤に日本近代の文化を認識論的に問いなおし、その根本にあるものを見出そうとした」のであり、「積極的に資料の紹介をおこなったのは、その方法であり、既成の概念に揺さぶりをかけ、排除された過去の「歴史」を検討するためにほかならなかつ

た¹²⁾とされるとおり、在野の立場から、従来の学問では顧みられることのなかった新聞・雑誌その他の雑多な史料を発掘し蒐集することによって、社会風俗や日常生活にいたる「社会万般の事相」のなかに、いわゆる正史からは見えてこない日本近代の成り立ちを探究していこうとするのである。こうした問題意識は、古文書や記録類の零細な史料にもとづき過去を再構築しようとする十一谷にも共有されていたことは間違いない。

明治文化研究会の成果は、昭和二年七月に三越で開かれて盛況を博した明治文化展覧会や、会員たちが苦心して蒐集した文献資料を編纂した『明治文化全集』（全24冊、昭2・10・5・7、日本評論社）の刊行などに結実し、幕末維新史への社会的関心を高めることに大きく寄与していく。その潮流は、大阪朝日新聞社が創刊五十年記念として昭和四年三月から一カ月以上にわたり大規模な展示を行った開国文化展覧会の開催にもつながり、ここでは尾佐竹猛の「幕末の外交」と題する講演が行われたりしている。

『中央公論』の主力読者層としての知識人読者たちは、文学にかぎらず社会や歴史のこのような動向に鋭敏な関心を抱き、時代の文化表象の一部分として「唐人お吉」を受けとめていったものではなかったか。そしてそのことが、次に見るように、十一谷の「唐人お吉」の発表を端緒とする、オペラや小唄、演劇、映画など、さまざまなジャンルにおけるお吉ブームという現象を生起していくのではないだろうか。

お吉ブームの到来

十一谷義三郎の「唐人お吉」を単行本化する話は、いち早く『中央公論』への発表直後に出版社から持ちかけられ、昭和四年一月、万里閣書房から単行本『唐人お吉』が刊行される。その発売時の新聞広告（『読売新聞』昭4・1・25）には、次のようにある。

昭和三年度の創作壇の最大収穫として、中央公論十一月号の創作欄全部を割いて、世に問ふて以来、世評激甚、讃否轟々、文芸の象牙の塔から脱して、国際的に、實際社会的に問題を惹起せしめたこの創作は、著者余年の苦心と準備とになれる力作である。

唐人お吉！お吉こそは日本最初のら・し・や・め・ん・たり、美しき侠婦であつた。日本近代文化の最初の窓を穿つた恩人ハリスの理解者として……これ人倫部に入るべきか、畜類部に入るべきか決しがたき動物……とまで冷笑嘲罵を浴びながら『唐人だつて人間さ！』の偉大な真理を発見した日米外交の隠れた功労者である。

ここで「文芸の象牙の塔から脱して、国際的に、實際社会的に問題を惹起せしめた」とあるところに、この小説が、狭い文芸の領域にとどまらず、社会的に幅広い一般読者に支持されたことがうかがえる。『唐人お吉』の売れ行きはきわめて好調で、発売後わずか一ヶ月あまりで八版を重ねている。また、翌三月には出版記念会が賑やかに行われたが、その多数の来会者のなかには、新感覚派の仲間たち、村松春水ら下田の地方雑誌『黒船』のメンバーなどのほか、有力な新聞のジャーナリストも少なからず交じっていた¹⁴。おそらくこの頃、各新聞メディアは、「唐人お吉」の続篇を新聞小説として掲載することに触手を動かしていたのだろう。三ヶ月後には、『東京朝日新聞』夕刊に「時の敗者——唐人お吉——」（昭4・6・29～10・6）の連載が開始されることになる。

一方、伊豆下田においては、この年四月に、下田保勝会（観光協会）、下田町役場、下田自動車会社（現・東海自動車）、黒船社などの各団体により、お吉の墓のある宝福寺で法事が盛大に営まれ、十一谷も招かれて参列している。県知事やアメリカ代理大使、新聞社などからは電文が寄せられ、お吉の後継者をもつて任じる下田芸妓も大勢で参加し、お吉が下田町の観光戦略の目玉として祭り上げられていくのである¹⁵。

村松春水によるお吉関係記事を掲げて、お吉の称揚につとめてきた地方雑誌『黒船』の代表者である森斧水は、にわかに来来したお吉ブームに十一谷が果たした役割について次のように述べている。

春水先生のお吉研究が黒船へ連載されて居た時分にはまだお吉の噂はさ程ではなかつた。

その後下田を訪づれた数多くの文士にお吉は必ず多少の興味を以て迎へられて居たに違ひないが全く打ち込んでお吉を取扱はれたのは十一谷義三郎氏が最初である。所が氏の『唐人お吉』が素振らしい人気を呼んで到頭今では下田と唐人お吉はつき物になつて了ふ程のお吉熱が醺醺して来た事は実に愉快の絶頂で、氏の芸術的努力に対しては勿論大いに敬佩の意を捧げるが同時に下田の水を飲んで居る吾々としてはお吉さんによつて下田が近頃馬鹿に引立てられて来た事に対しても多大のお礼を十一谷氏に申上ても差支はあるまいと思ふ。（『お吉雑感』『黒船』昭4・5）

それまでお吉に関する通俗的な読み物や随筆、評判記の類は少なくなかつた。⁽¹⁶⁾しかし、十一谷はそれらとは異なり、ひたすら芸術性を追求して真摯にお吉の人生に向き合うことによつて、お吉の存在を卓しい蔑視の対象から時代の犠牲となった不幸なヒロインへと価値転倒させたのである。

この十一谷の「唐人お吉」と相前後して、小説以外のジャンルでもお吉を取りあげる目論見はいくつか進行しつつあつた。

アメリカのジャーナリストで詩人のパーシー・ノエルは、アメリカ大使バンクロフトの知遇を得て、かねてよりハリスとお吉の物語をオペラにしようと構想し、下田に滞在して台本を書き、作曲を山田耕筰に依頼していたが、十一

谷が「唐人お吉」を発表してまもない昭和三年十一月、山田はそのオペラの序曲の一節を作曲して、下田宝福寺のお吉の墓前で披露する。「プチニーの名作「お蝶夫人」の人氣がそろ／＼あきられて来た今日これに代る大物のオペラを作曲したい」(「オペラになる『唐人お吉』」『東京日日新聞』昭3・11・29)との意欲を示した山田は、翌年秋には序幕を完成させる⁽¹⁷⁾。

また、演劇では、昭和四年三月、大阪の浪花座において、先述の大阪朝日新聞社主催の開国文化展覧会に協賛⁽¹⁸⁾された中、田中総一郎脚本による「唐人お吉」が、片岡我童のお吉、市川九団次のハリスで上演される。さらに同年八月には東京の歌舞伎座で、真山青果脚本の「唐人お吉」が、市川松蔭のお吉、大谷友右衛門のハリスで上演され、好評を博して日延べ興行となり、引き続き九月に続篇を上演して人氣を集めた。また、浜村米蔵の戯曲「日本開国記」およびその続篇「唐人お吉」が『舞台戯曲』(昭4・11・5・8)に、山本有三の戯曲「女人哀詞」が『婦女界』(昭5・1・3)に相次いで発表されることになる。

このうち真山青果のお吉劇は、東京ー下田間の定期旅客船を就航させている東京湾汽船(現・東海汽船)が歌舞伎座とタイアップして観劇会を実施したり、割引切符を発行したりしている⁽¹⁹⁾。さらにこれにあわせて、西条八十が唐人お吉を題材とした「黒船小唄」を東京湾汽船の依頼により作詞し、中山晋平が作曲して、下田観光の宣伝に一役買うことになる⁽²⁰⁾。こうしてお吉ブームは、一種の社会現象ともいえるべき様相を呈していくのである。

これらの多様なジャンルにわたるお吉ものの流行は、本来は十一谷の「唐人お吉」と関係があるわけではないが、その端緒を開いた十一谷は、お吉人氣の先導者として否応なくブームの前面に押し出されて行かざるをえない。たとえば歌舞伎座のお吉劇上演時には、十一谷は東京湾汽船の観劇会に引っぱり出され、またその伊豆航路のパック旅行参加者には十一谷の単行本『唐人お吉』がもれなく配られたという⁽²¹⁾。下田町で企画される土産もののお吉人形その他

の相談もまた、次々と持ちかけられた。明治文化研究会の同人たちの来訪を受け、お吉問題に関する論争を展開するのも同じ頃であり、この年の九月には、十一谷は同会の依頼により「唐人お吉について」と題する講演を行っている。

そしてこのお吉ブームがさらに大衆化していくのに大きく寄与することになるのが、映画「唐人お吉」の公開に他ならない。十一谷の「唐人お吉」を映画化する話は、昭和四年八月に日活と松竹が競うように企画を持ち込み、激しい争奪戦を繰り広げた末に、日活が溝口健二監督による特作映画として上映権を獲得する。⁽²³⁾翌年二月には、映画公開に先行して西条八十作詞による「唐人お吉の唄 黒船篇」(作曲・中山晋平、歌・佐藤千夜子)および「唐人お吉の唄 明烏篇」(作曲・佐々紅華、歌・藤本三吉)の小唄レコードがビクターから発売されて人気を呼び、映画の撮影も下田町を挙げての協力のもと大がかりなロケーションが行われて話題を集めた。⁽²⁴⁾映画制作の前にお吉役の梅村蓉子とハリス役の山本嘉一に会った十一谷は、梅村が熱心に「お吉の気合ひ、お吉の風姿、お吉の嗜好、などなど、細かく突込んで来るその質問が、いち／＼ツボにはまッて、愉快だつた」、「僕は、(中略)梅村君に、僕のまぼろしを、出来るだけくわしく、説明した」と期待感を表明し、畑本秋一の台本についても、「到底、創作では表現し得ぬ点まで、うまく写真それ自体のハタラクを、活用してあつた。つまり、個人と社会との対立。進展してゆく時代と個人との相関状態が、いろ／＼、画になつてゐた」と称えている(「唐人お吉の映画化」『映画時代』昭5・6)。同年七月に公開された溝口健二監督の日活映画「唐人お吉」(サイレント)は、梅村や山本らの熱演と相俟って、「剣戟衰退の声高い折柄、時代劇の文芸的領野を拓いた意義ある作品」(「試写の印象／日活超特作『唐人お吉』」『三六新報』昭5・6・30)というように好評を博し、ビクターから発売された二篇の主題歌「唐人お吉の唄」のレコードも、売り上げが十二、三万枚にのぼるヒット作となった。⁽²⁵⁾この日活映画の公開によって、お吉ブームは頂点に達するのである。⁽²⁶⁾

こうしてにわかに到来したお吉ブームの喧噪に巻き込まれ、慌ただしい日々の中で、十一谷の新聞小説「時の敗者

——唐人お吉——」およびその続篇は書き継がれていった。ようやく「時の敗者——唐人お吉【続篇】——」の連載が終わりを迎えるのは、日活映画「唐人お吉」が封切られる数週間前のことである。

注

- (1) 『中央公論』発売時の広告における「唐人お吉」の紹介文は、新聞によって違いがある。『読売新聞』（昭3・10・20）では、広告の冒頭部に「鑑唐人お吉——ラシャメン創生記（二百枚）——」というタイトルが黒地に白抜きで配され、「唐人お吉彼女こそは維新日本の痛ましい犠牲者であつた。数寄妖美なる彼女の生涯はいかに維新裏面史を彩るであらうか？」というコメントが付されている。また、『大阪毎日新聞』（同）には、「艶名下田の海港を庄する稀世の美音と容色人形お吉の時代を経て世は物情騒然たる黒船渡来時代における唐人お吉の生活はハリスを背景として色彩と波瀾に富む半生だ作者は今お吉の見た夢の跡を辿り魂の苦悩を描く二百枚近來の大作」とある。こうした『中央公論』の新聞広告は、『木佐木日記』第三卷（一九七五・一二、現代史出版会）によれば、編集者の仕事であり、これらの「唐人お吉」の広告文は当時同誌の編集にあたっていた木佐木勝が書いたものと推定される。
- (2) 嶋中雄作編『回顧五十年史』（昭10・10、中央公論社）。
- (3) 本稿で言及する十一谷義三郎の嶋中雄作宛書簡は、すべて神奈川県近代文学館所蔵特別資料による。なお、引用にあたり漢字の旧字体は新字体に改め、文の区切りに適宜空白を補った。
- (4) 初出は『文芸春秋』昭和四年一月号。十一谷義三郎の嶋中雄作宛書簡（昭3・10・20）によれば、彼が『中央公論』に発表した「唐人お吉」で、お吉の生涯を十分に書き尽くすことができなかつたために、村松春水の原稿を補綴取捨し、全面的に書き改めて発表する義務が生じたとあり、この村松の「唐人お吉を語る」には十一谷の大幅な修訂がほどこされているらしい。
- (5) 前掲『木佐木日記』第三卷。
- (6) 渡辺賞は、北海道函館市の資産家渡辺家が文芸好きだった亡き子息の思い出にと文芸協会に寄付した基金をもとに、協会の一般投票により前年度に優秀な作品を発表した新進作家に贈られたもので、昭和二年から四年まで三回行われた。第三回は、十一谷のほかにも大仏次郎と平林たい子が受賞している。

- (7) 永嶺重敏『雜誌と讀者の近代』（一九九七・七、日本エディタースクール出版部）。
- (8) 木佐木勝『木佐木日記』第二卷（一九七五・八、現代史出版会）。
- (9) 吉田常吉『唐人お吉——幕末外交秘史』（一九六六・二、中央公論社）。
- (10) 「日本に於けるタウンセンド・ハリス君の事跡」『渋沢栄一全集』第六卷、昭五・12、平凡社。
- (11) なお、お吉がハリスの侍妾だったとする説は、現在ではほぼ否定されている。坂田精一『ハリス』（一九六一・五、吉川弘文館）および吉田常吉『唐人お吉——幕末外交秘史』（前掲）によれば、お吉は健康を害していたハリスのもとに看病人としてわずか三夜通っただけで解雇されたという。お吉の母親と姉婿が御用所掛の役人に差し出した嘆願書にもとづく見解で、確かな事実と考えられるが、十一谷が「唐人お吉」を執筆した当時は、この史料は未発見であつて、お吉とハリスの関係については不明な点が多かつたことに留意する必要がある。
- (12) 関井光男「日本近代文学研究の起源——明治文化研究会と円本——」（『日本文学』一九九四・三）。
- (13) 十一谷義三郎嶋中雄作宛書簡（昭三・10・22）による。
- (14) 東崇記「お吉さんの会」（『黒船』昭四・5）。
- (15) 西太郎「お吉さんの法会」（『黒船』昭四・5）、十一谷義三郎「お吉手帖から」（『読売新聞』昭五・1・24）。
- (16) お吉を描いた小説としてもっとも早いものに、信田葛葉『薔薇娘』（大2・1、万字堂書店・杉本梁江堂）がある（初出は『洋妾物語』という原題で、『都新聞』明44・9・22〜10・22連載）。その他、お吉を取り上げた文献については、村松春水『^英唐人お吉』（昭五・4、平凡社）に詳しく紹介されている。
- (17) その後、アメリカでの上演計画が頓挫したため、オペラの作曲は一時中断されるが、昭和十五年十一月、日本楽劇協会の皇紀二千六百年記念演目として英語台本を日本語に翻訳して東京宝塚劇場で上演された。原題は「黒船」だったが、初演時には「夜明け」と改められ、戦後に原題に戻されている。
- (18) 『浪花座筋書』「口上」（『近代歌舞伎年表大阪篇』第八卷、一九九三・三、八木書店）。
- (19) 広告「下田遊覧と歌舞伎座観劇」（『東京朝日新聞』夕刊、昭四・9・1）。
- (20) 森一也「解題・解説」（『西條八十全集』第八卷、一九九二・一一、国書刊行会）。
- (21) 朴東誠「近代日本における「地域社会」の形成と変容——静岡県下田市の事例を中心に——」（二〇〇六・三、東京大学博士論文）。

なお、万里閣書房から刊行された十一谷の『唐人お吉』第八版（昭和四年二月二十五日発行）には、異版がある。通常のもの最終頁が白紙になっているが、異版の最終頁には、「東京・下田間汽車、汽船行程一覧表」を掲げ、そこには汽船と乗合自動車の時刻表、所要時間、料金などが記され、一種の観光案内的な要素が付与されている。

(22) 注(13)に同じ。

(23) 同前。

(24) 木下千花「革命前夜——溝口健二の『唐人お吉』（一九三〇年）」（『溝口健二論——映画の美学と政治学』所収、二〇一六・五、法政大学出版局）。

(25) 十一谷義三郎「サーカスに語る（下）」（『読売新聞』昭七・六・三）。

(26) なお、「唐人お吉」の最初の映画化としては、昭和五年六月に封切られた河合映画があり、監督は村越章二郎、主演は琴糸路で、村松春水の『唐人お吉』（前掲）を原作としている。ただ、「河合プロの琴糸路が逸早く主演したが、唐人お吉——日活と云ふ迄に一般には信じ込まれてゐる」（『読売新聞』昭五・七・一）とあるように、その人気は日活映画「唐人お吉」に圧倒された。

付記

本稿執筆にあたり、資料の公開をご許可いただいた、十一谷・嶋中ご両家ならびに神奈川近代文学館に御礼申し上げます。

本研究は、平成二十八年年度関西大学国内研究員研究費によって行った。